アイヌの昔話　カムイを射止めた男の子

わたしは、まだら鳥のカムイです。
「銀色　降る降る　きぃらきら
金色　降る降る　きぃらきら」
そう歌いながら、つばさを広げ、川に沿って、ゆうゆうと下っていくと、
子どもたちが、手に手に弓を持って、遊んでいました。

かわいいなあ、と思って見れば、
なんと、ツギハギだらけの着物を着た子どもを、
みんなで、よってたかって、いじめているではありませんか。

そこで、
「銀色　降る降る　きぃらきら
金色　降る降る　きぃらきら」
と鳴きながら降りていくと、
子どもたちは、いっせいに振りかえり、わたしを見あげました。

「あ、えらいカムイが、いらした。
みんな、じっとしているんだぞ」
そう声をあげたのは、お金持ちの村長の子です。

その子は、わたしに向かってきりりと弓をしぼると、ひょうと矢を放ちました。
わたしは、はじめの矢を下によけ、二番目の矢を上によけ、
矢が飛んでくるたびに、ひらりひらりと、身をかわします。
子どもは、くやしがって、つぎからつぎに矢を放ちましたが、
とうとう矢がつきてしまいました。

「よぉし、いま、あたらしい矢をとってくるからな」
お金持ちの子は、そういうと、走っていってしまいました。
子どもたちも、ばらばらと、お金持ちの子をおいかけました。

たった一人、残されたのは、あのいじめられっ子です。
子どもは、土をはらって、涙をぬぐいながら起きあがると、
弓に矢をつがえ、わたしに狙いをさだめました。
そして、まだ涙のたまった目でわたしを見つめ、
わたしをよろこばせようと、とびっきりの笑顔を見せてくれたのです。
そのようすが、あまりにもいじらしかったので、
わたしは、はじめの矢をよろこんで受け、
二番目の矢も、しっかりと受けとめました。

すると、わたしは矢を抱いたまま、
まっさかさまに、地上に落ちていきました。

子どもは、すぐさま、わたしにかけより、
その両腕に、わたしをだいじそうに、かかえてくれました。
そして、うれしそうに、
コタンのほうへと、走っていったのです。

コタン＝むら

コタンのはずれには、いまにもたおれそうな古い家が、ありました。
子どもは、その家の子でした。
家に入ると、おばあさんが一人、ぽつんとすわっていました。
おばあさんの着物も、ぼろぼろです。
二人は、たいへんな貧乏をしていました。

子どもは、わたしをいちばん位の高い席におくと、おばあさんにいいました。
「すばらしいカムイが、うちにやってきてくださいました。
どうか、イナウを作って、カムイにさしあげてください」
イナウとは、木を削って作る、ふさふさしたもののことです。
それは、わたしへのすばらしい贈り物なのです。
おばあさんは、ゆっくり首を横にふると、こういいました。
「イナウを削るのは、女の仕事ではありません。
女は、さわることも許されないのです。
それは、男の子である、おまえの仕事ですよ」
子どもは、すなおに「はい」とうなずくと、
いっしょうけんめい、木を削りはじめました。

やがて、りっぱなイナウができました。
削り花も、たくさん、できました。
子どもは、わたしを、削り花できれいに包んでくれました。
そして、大切にしまってくれたのです。
その時のことでした。
お金持ちの子が、ずかずかとやってきたのです。

「おい、おまえ、あのりっぱなカムイを見なかったか」
お金持ちの子は、乱暴にききました。
「ぼく、知らない」
「ほんとうか」
「うん、見なかったよ」
貧乏人の子は、しらばっくれました。
せっかく家にきていただいたカムイを、
横どりされては、たまりません。
「そうか、カムイは、どこへ飛んでいってしまったんだろう。
せっかくおれさまが、仕留めてやろうと思ったのに」
お金持ちの子は、ふくれっつらで、帰っていきました。

わたしは、よくよく子どもの顔を見ました。
どこかで見たような顔です。
そこで、はたと思いだしました。
「ああ、あの二人の子だ！」
わたしはこの子のおとうさんとおかあさんを、よく知っていました。
とても心のよい人々で、大切に見守っていたのです。
ところが、わたしがふと、目を離したすきに、
ひどい事故にあって、二人とも死んでしまいました。
それからは、おばあさんが一人で、この子を育ててきたのでしょう。
それで、こんなに貧乏になってしまったのだと、わかりました。

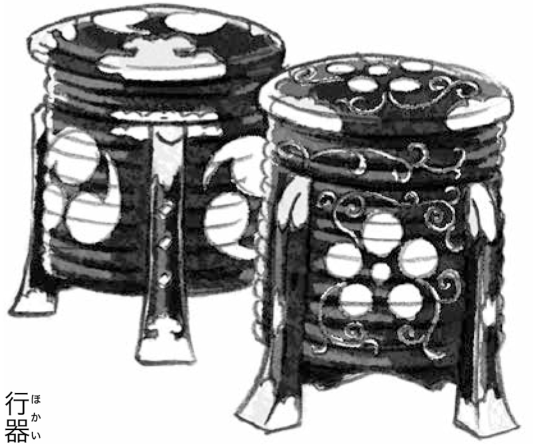
わたしは、この子どもを大切に見守ってやることにしました。
子どもは、毎日ていねいに、わたしに、お祈りを捧げてくれました。

そのため、子どもが大きくなって狩りに出るようになると、
行く手には、まるで天から降ってきたかのように、つぎつぎと獲物が現われ、
矢は、一本も、はずれることがありませんでした。
家には、たくさんの木の行器や、金の行器が並ぶようになり、
そのなかには、食べ物や宝物が、いつもぎっしり詰まっていました。

やがて、その子は一人前になり、古いぼろぼろの家のかわりに、
あたらしい、りっぱな家を建てました。
そして、わたしをまつってくれたのです。
わたしは、家の守り神として、ずっと家族を見守りました。
貧しかった子どもは、みんなから尊敬されるりっぱな人になり、
その名は遠くまで、とどろきました。

ですから、わたしも、ごらんのように、
ますます格の高いカムイになることができたのです。

と、まだら鳥のカムイが、語りました。


行器(ほかい)